近世後期における伊勢神職の文化受容とネットワーク

神谷朋衣

はじめに

これまで筆者は、在方における、歌舞伎・浄瑠璃を中心とした芸能文化の広がりを、文化を受容する人々の立場から検討してきた。先に考察対象とした、三河国加茂郡足助村の商家小出家は、芝居情報の収集や浄瑠璃稽古の師匠の招聘といった点において、名古屋・伊勢といった東海地方の諸都市と結びついていた。[1] この点をふまえ、本論文は、在方への芸能文化の伝播に際して拠点となった、地方都市における文化状況について、伊勢の事例に即して考察したい。

近世期の伊勢における文化は、伊勢参りの隆盛と大きく関わりつつ発展してきたとされている。[2] 二〇一三年に刊行された『伊勢市史第三巻　近世編』は、「交流と拡散の町人文化」として、近世伊勢の出版・芸能・文芸・学問等について論じているが、これらの文化の形成過程には、「諸国からの文物の流入と、伊勢からの拡散という、二つの注目すべきモメントがあった」と述べている。伊勢神宮に参詣する民衆と、各地の檀家を廻る伊勢御師は、文物の流入と文化の拡散の担い手であった。三都を初めとした地域から文物がもたらされ、在来の文化と融合した結果、「個性的ではあっても、決して閉鎖的ではない独自の地方文化が醸成されていった」のである。[3]

それでは、そうした状況を踏まえて、文化を受容する人々の視点から見たとき、近世における伊勢の文化に、どのような特質が見られるのだろうか。また、文化を受容するネットワークはどのように形成されていたのだろうか。

この点について考えるために、本論文は、近世後期の伊勢神宮外宮の正禰宜、檜垣（度会）常善（一八〇二～一八六二）を取り上げ、『常善雑事記』[4] を用いて、文化受容の諸相を検討する。『常善雑事記』は、天保二年（一八三一）から文久元年（一八六一）の三〇年間にわたる、檜垣常善の私的な日記である。伊勢神宮の神事祭祀や、冠婚葬祭の交際、世間の動向といったことを書き留めており、芸能を

中心とした文化記事も充実している。

著者の檜垣常善は、山田の宮後西河原町に住む禰宜であった。外宮の神宮家の出身である。近世の宇治山田においては、家格によって第一等から第七等に分かれた身分体系が成立していたが、神宮家は、その第二等にあたる。[5] 伊勢神宮の神事祭祀を担う、正員の禰宜を輩出する家柄であった。近世の伊勢神宮の内宮・外宮においては、各一〇人の正禰宜が神事祭祀の運営に携わり、私的に師職を兼業した。常善自身も正禰宜の一員として、文化一一年（一八一四）に十禰宜に就任し、文久元年（一八六一）には外宮長官となった。

檜垣常善は、文化面において、神祇・神社関係を中心とした書物を著したことと、[6] 和歌や画に通じていたことが知られている。[7] しかし、文化の受容者としての側面については、ほとんど触れられずにきた。『常善雑事記』を取り上げるのは、本史料が檜垣常善の文化の受容状況を示すものであり、宇治小田地域の文化状況の一端をうかがうことができるからである。近世の伊勢神宮の正禰宜は、在任中勅許がなければ、宮川外へ出ることがかなわない「禁河の制」[8] が課されていた。一〇代前半に外宮の正禰宜に就任した常善は、生涯の大半をこの「禁河の制」の下、宇治山田を中心とした地域において生活を送ることとなった。

伊勢神宮の正禰宜の文化活動および、彼らを取り巻く文化状況については、和歌・学問・国学といった分野における個人の事蹟や著作、[9] 神宮文庫の前身となった、外宮の豊宮崎文庫・内宮の林崎文庫で行われた学問活動、[10] 文芸サークルや交遊関係、[11] といった点に光が当てられてきたが、禰宜の職務や生活、地域との関係を含めた文化の実態については、検討の余地がある。『常善雑事記』の文化記事を中心に分析することによって、上記の課題に応えたい。なお、『常善雑事記』における文化関連記事は、茶の湯、蹴鞠、能狂言、歌舞伎・浄瑠璃といった芸能文化に関するものが多く見られる。今回検討する文化の内容も、これらの芸能文化中心となることを断っておく。

1. 檜垣常善の家業・生活の人的交流

本章は、檜垣常善の禰宜としての職務・生活が地域とどのように関係していたのか、弘化二年（一八四五）を中心に明らかにしたい。[12] 先に述べたように、神宮家の禰宜たちの職務は、神宮祭祀の運営と、参宮者への対応であった。具体的には神嘗祭や濱出神事など、外宮の神事に参加したり、山田奉行や「女院様」「准后様」といった朝廷の人物からの使者の参宮に対応したりした。禰宜の業務に関する記事には、神事の参加者や役割が書かれており、常善が主に外宮の禰宜と関わりつつ日常業務をこなしていたことが分かる。

常善と外宮の禰宜たちとは、職務を通じてのみ関係を持っていたわけではない。縁戚関係や冠婚葬祭など、家同士の結びつきもあった。弘化二年（一八四五）正月一七日、常善の家では、一一日に生

まれた女児お象のお七夜が「内祝同様」質素に行われた。このとき、「近親」として呼ばれたのが、檜垣貞董（「七神主殿」）・松木茂彦（「九神主殿」）・橋村正並（「橋村主水殿、宰記改名」）・「隼人殿」といった人物である。檜垣貞董の家は、常善の家の分家の一つであり、常善とは特に親密な関係が見られる。

また、『常善雑事記』弘化二年（一八四五）の冊には、七件の訃報が記されている。七件の内訳は、山田の師職家の人物が二件と、外宮神宮家の人物が五件である。[13] 山田の師職に対しては、使者を遣わして饅頭などを届けている。神宮家に対しては、常善の家から見舞いの使者や供物を遣わす他、自身や息子の常緒が見舞いや墓参りに出かけ、丁重な対応が見られた。

このように、檜垣常善の禰宜としての業務、生活における人的交流は、山田地域を中心に広がっており、中でも外宮神宮家との交流は重視されていた。それでは、こうした人的交流と文化の受容は、関係するのだろうか。次章以降検討したい。

2．生業・生活の人間関係と文化交流

【表】は、『常善雑事記』に登場する文化記事の一覧である。本章から第四章にかけて、これらの記事を中心に、檜垣常善の文化ネットワークと地域との関わりについて検討し、文化受容の実態を明らかにしたい。『常善雑事記』には、茶の湯、歌舞伎・浄瑠璃、能狂言といった芸能を中心に二〇〇近くの文化記事が見られる。これらの記事の大半には、常善以外に複数の人物が登場し、中には繰り返し見られる名前もある。このような文化ネットワークは、どういった人物から構成されていたのだろうか。初めに、第一章で述べた、家業・生活における人的交流との関係について述べておきたい。

【表】「参加者」の欄を見ると、外宮正禰宜の名前が見られる。先に述べたように、家業や生活において関わりを持つ人々である。

弘化二年（一八四五）から文久元年（一八六一）までの『常善雑事記』の文化記事には、宮後朝喬・久志本常達・久志本常庸・檜垣貞董・久志本常伴・松木茂彦といった、常善とほぼ同時期に外宮の正禰宜を勤めた人物が登場する。これらの人物は、一部を除いてほぼ継続的に『常善雑事記』の文化記事に名前が見られる。また、松木偉彦・檜垣貞賢・檜垣貞吉は、それぞれ嘉永三年（一八五〇）、安政二年（一八五五）、安政六年（一八五九）以降の記事に登場する。いずれも外宮の正禰宜に就任した後、文化記事に名前が見られるようになる。[14] 正禰宜就任をきっかけに、常善の文化交流に参加するようになったのだと思われる。家業や、家同士の交際を通じて形成されていた外宮禰宜の結びつきは、禰宜としての業務や冠婚葬祭に限らず、文化面にも影響を及ぼしていたのであろう。

それでは、これらの人々とは、文化面においてどのような交流があったのだろうか。例えば、常善の家の分家であり、親戚としての交際が見られる檜垣貞董は、弘化二年（一八四五）～文久元年（一

八六一）にかけて文化関連記事に名前が見られる人物の一人である。檜垣貞董の登場する記事は、茶の湯、歌舞伎・浄瑠璃見物、能狂言、花見など、多岐に渡る【表】〔16・61・68・105・106・135〕[15]。弘化二年（一八四五）正月末から二月にかけての、津への旅行〔2～10〕や、弘化四年（一八四七）二月中旬から下旬にかけての松坂への旅行〔53～58〕にも同行していた。親類として交流のあった松木茂彦についても、茶の湯、歌舞伎・浄瑠璃、軍談、開帳見物など、様々な記事に登場している〔21・26・68・69・100〕。また、宮後朝喬・久志本常庸・久志本常伴も同様で、茶の湯・芝居・浄瑠璃・能狂言といった文化を享受した。

また、家業や生活を通じた人間関係から派生した交流が、文化交流に関わることもあった。常善が、檜垣貞董とともに、弘化二年（一八四五）に津へ旅行していたことについては先に述べた。このとき、津において一行の宿泊を世話し、案内役を務めたのが、前川屋喜右衛門と円明寺である。両者はいずれも、先年の伊勢参宮の際、檜垣貞董の弟である松木武彦（大隅）[16]宅に逗留しており、檜垣貞董とも知人であった[17]。また、前川屋は、津、伊予町の材木屋であり、松木武彦の縁家であった[18]。常善・貞董は、前川屋・円明寺の人々と津観音の鬼押神事を見物し、滞在中に茶の湯を楽しんだ〔3～6〕。また、三月には前川屋が商用で松木武彦宅に逗留しており、常善は前川屋を自宅に招いて、貞董とともに薄茶でもてなした〔16〕。このように、日常の人間関係から派生した関係も、常善の文化の受容に関わっていた。

以上、家業・生活における交際によって生じた人間関係や、そこから派生する関係が、檜垣常善の文化ネットワークの一部を構成していたことを述べた。

3. 雅号を持つ人々との文化交流

前述のように、檜垣常善の文化ネットワークを構成する人々に、家業・生活によって結びつく人々がいた。これに加えて、家業・生活に直接関わるわけではない、雅号を持つ人物との交流も見られる。『常善雑事記』には、金森得水（号「琴屋」、伊勢国田丸藩家老、茶人）、川邊都盛（号「十松」、大宮司）、幸福将監（号「採蘭」）、來田本親（号「木蘭」、外宮権主典）、久保倉正意（号「楓橋」）、北川政武（号「橘園」、四条派絵師、「北川丹下」等と記される）、笠松梅西（篆刻・画・俳諧）といった人物が登場する[19]。

これらの人物とは、必ずしも家業や生活の上で親密な交際があるわけではなく、文化的営みを通じて交流の機会を持っていた。茶の湯を例に見てみよう。常善は、茶の湯を採蘭（＝幸福将監）に師事しており、稽古に参加することもあった。弘化二年（一八四五）四月五日〔17〕や六月五日〔27〕、弘化三年（一八四六）一〇月二五日〔47〕に見られる「採蘭釜日」[20]をみると、弘化二年（一八四五）四月五日は、採蘭・常善以外に、木蘭・讃岐・和琴、六月五日は、

木蘭・祝部・堤・常明寺・長尾、弘化三年（一八四六）一〇月二五日は、帯刀・常明・中西佐渡・長尾といった、茶道の師を同じくする人々が参加していた。これらの人物の中には、和琴のように、茶の湯を通じて関わるだけではなく、常善と共に月見・座敷狂言・芝居見物・軍談といった芸能を享受する人物もいる〔33・60・61・112〕。

二松・鶯軒・北川政武といった人物とも様々な文化により結びついていた。二松は、茶の湯・芝居見物・浄瑠璃・軍書・蹴鞠などの機会を通じて常善と交流している〔13・21・24・68・82・112など〕。鶯軒とは、茶の湯・芝居見物を楽しんでいる〔61・93〕。また、北川政武は、茶の湯・浄瑠璃・芝居見物・軍談などの場に同席している〔23・30・68・112など〕。常善が招待するときもあれば、相手の招きに応じて出かけることもあった。

以上、『常善雑事記』文化関連記事の概要と、檜垣常善の文化ネットワークの様相を検討してきた。常善の文化ネットワークを構成していたのは、家業・生活において関係をもつ人々と、文化交流を中心として関係をもつ人々であった。これらの人的交流は、入り交じりつつ常善の文化交流の世界を構成していた。

4．文化記事の性格

次に、抽出した文化記事の内容に触れたい。場所に着目すると、宮後西河原町の常善の自宅を初めとして、上中之地蔵町、八日市場町、田中中世古町など、多くは宮川内の神宮領にあたる地域に集約される。これらの地域は、先に述べたように、常善の生活・生業の交流圏とほぼ重なっていた。一方、弘化二年（一八四五）正月二九日から二月七日の津への旅行〔2～10〕、弘化四年（一八四七）二月一八日から二六日の松坂への旅行〔53～58〕のように、例外も見られる。このような遠方への旅は、炙治の穢れを口実にして出かけたものであった[21]。神宮禰宜は、死をはじめとした穢れに触れた場合、一定の期間神宮に奉仕することができなかったが、炙治の穢れもそうした穢れの一つであった。弘化四年（一八四七）の松坂への旅行の際にも同様の手続きをとった〔53〕。以上のように、文化関連記事に見られる常善の行動範囲は、津や松坂など一部の例外が見られるものの、基本的には生活・生業の交流圏と重なる、宮川内の神宮領が中心であった。

記事の内容を見ると、茶の湯、囲碁、香道、芝居、能狂言、軍談、落咄、寺社参詣、踊り、蹴鞠など多様である。

中でも、茶の湯に関する記事は多く見られる。「採蘭釜日」のように、茶道の師匠、採蘭（幸福将監）のところに稽古に出かけたり〔17・27・47〕、自宅で茶席を設けたり〔13・25・32など〕、鶯軒・袴田君（宮後朝喬）・琴屋老人（金森得水）らの茶席に参加することもある〔12・34・45など〕。茶席において、席画（宴会・会合の席上で、求めに応じて即興的に絵を描くこと）や香が行われることもあった〔95・115・116〕。また、単なる娯楽ではなく、交際の手段

として用いられることもあった。弘化二年（一八四五）五月二八日は、橋村壱岐宅において釜がかかり、列席者に薄茶・懐石を振る舞われている〔24〕が、「役免宗旨内願内密差合之儀承之、（中略）道具類者用談ニ紛不記之」と書かれており、元は仕事の話し合いの場であった。このような例は、同年一一月一五日にも見られる。このときは、本家である檜垣内匠家の、資金繰りに関する話し合いの場で、常善は列席者に茶を振る舞った〔39〕。近世の伊勢において、参宮者のもてなしや自身の修身のため、茶の湯が流行したということが指摘されているが[22]、『常善雑事記』にみられるように、茶の湯が娯楽や交際のツールとして機能した背景には、近世の伊勢における茶の湯の浸透があったと考えられる。

茶の湯に続き多く見られるのが、芝居・浄瑠璃・軍談・落咄の記事である。芝居については、中之地蔵芝居や古市芝居の見物が大半であり、人形芝居も含まれる。中之地蔵・古市の二つの芝居小屋は、近世中後期、継続的に興行を行い、伊勢の芝居の中心となっていた[23]。娯楽のためだけではなく、接待に用いられることもあった。弘化二年（一八四五）四月に、常善は津の妙清院の人々と古市芝居を見物している〔18〕。津の妙清院は、伊勢参宮を目的に来訪しており、常善は、迎えや宿泊などを世話していた。両宮参拝後、芝居見物をしたいという希望があり、古市芝居の見物を決めたという経緯があった[24]。浄瑠璃や軍談、落咄に関しては、自宅等に招いて楽しむのが主であり、檜垣常善宅〔67・69・96・167〕、北川政武宅〔68・144〕、野亭〔104〕、二松宅〔112〕、田中宅〔145〕が会場となっている。弘化四年（一八四七）には、講釈師秀山を自宅に招き、一一月一日から三日の三日間、軍談「赤穂記」を楽しんだということが書かれている〔67〕。この秀山は、常善宅に来る前は上之郷で興行中であり、近隣の芸能興行地との結びつきがあったことが分かる。秀山は、約二週間後、再び常善宅に招かれ、一九日～二一日にかけて「伊達騒動」を上演した〔69〕。また、芝居については、見るだけでなく、上演することもあった。弘化四年（一八四七）四月二〇日には、外宮七禰宜の久志本常伴が座敷狂言の会を催している〔60〕。このとき、『千両幟』「内の段」、『妹背山』「山の段」を上演し、常伴・和琴・越後・亀田といった人物が役者をつとめた。

演能もたびたび見られ、久保倉正意宅等で上演されたり、近隣の寺院で興行が催されたりしている〔106・142・164など〕。この他、蹴鞠〔76・82など〕や、相撲興行〔86・141・153〕の記事もある。また、寺社参詣や開帳、会式は、多くの場合、見世物・曲芸・踊りといった様々な芸能を伴い、練り物・作り物が参詣者の目を楽しませた〔56・84・158〕。

以上をふまえ、これまでの内容をまとめておきたい。檜垣常善を取り巻く文化ネットワークは、家業・生活の人的交流と、雅号を持つ人々との文化的結合をもとに成り立っていた。こうしたネットワークや文化の諸相を見ると、津や松坂への旅行のような例外は見られるものの、宮川内の神宮領を中心とした、狭い地域において展

開していたことが分かる。これらの地域は、常善の日常生活における活動の範囲とほぼ一致していた。このような傾向は、正禰宜という身分による制約から生じたものであったと思われる。しかし、当該地域においては、茶の湯を初め、囲碁、香道、芝居、浄瑠璃、能狂言、軍談、落咄、寺社参詣、踊り、蹴鞠など、多種多様な文化を享受することができた。

5．文化の受容と地域

（1）情報の伝達と書物の集積

本章では、檜垣常善の文化受容において、他地域との関係にどのような傾向が見られるか、明らかにしたい。初めに、情報の伝達や豊宮崎文庫における書籍の集積状況を検討し、次に、『常善雑事記』の文化記事に見られる傾向を検討する。

まず、情報の伝達について述べておこう。遠隔地の情報は様々な形で常善のもとに届いていた。弘化二年（一八四五）二月五日条には、正月二四日の江戸青山の火事の詳しい様子や、二六日の京都誓願寺焼失を伝える記事が見られるが、これらは「飛脚所より申来」た情報であることが記されている。弘化四年（一八四七）四月七日条にも、「飛脚屋」から伝え聞いた信州の地震（三月二四日）の情報が記された。「信州辺至而厳敷由、其内善光寺格別之由、色々風説ス、飛脚屋」と書かれており、信州の被害が大きいこと、中でも善光寺の損害が甚だしいことなど、様々な噂が流れていたことが分かる。また、嘉永六年（一八五三）正月二四日条には、前年の冬に起きた、江戸富士見御宝蔵に盗賊が侵入した一件について記されているが、これは黙蛙君（＝久志本常伴）から借用した「風説書」を書き写したものであった。この他にも、弘化三年（一八四六）の江戸大火、嘉永七年（一八五四）の京都大火など、様々な情報がもたらされている。このように、飛脚や禰宜の情報網を介して、常善は遠隔地の情報を得ており、特に江戸の情報を積極的に得ようとする様子が伺える。

書物の集積という点では、外宮祠官の学問所として慶安元年（一六四八）に創設された、豊宮崎文庫が一つの拠点であった。「籍中」と称する、三方会合や町年寄等、富裕な町人層を中心とした会員組織が、書籍購入費や運営資金を出資し、文庫の管理にあたった。書籍の貸し出しは「籍中」に限られていたが、非会員であっても施設内で書籍を閲覧することができた。[25]『常善雑事記』には、安政元年（一八五四）、二年（一八五五）、五年（一八五八）、六年（一八五九）の一二月の記事に、その年の豊宮崎文庫に奉納された書物や絵図の覚書がみられる。ここには奉納された書物の書名、寄付者・紹介者の氏名が書かれており、様々な地域から奉納されていたことが分かる。寄付者は、伊勢や津といった近隣地域の人々の他、鎌倉[26]、下総[27]、京都[28]、大坂[29]、三河[30]、信州[31]、周防[32]、長崎[33]、といった遠隔地の人々も含んでいた。以上のように、情報の伝達や書物の集積という点におい

ては、広範な地域からの流入が見られた。

(2) 芸能文化の受容

次に、芸能文化の受容について見ておきたい。檜垣常善の文化ネットワークや文化受容の場は、基本的に伊勢を中心とした地域で形成・展開されていたが、他地域からの来訪者が加わることもあった。

弘化五年（一八四八）二月二三日、常善は二松と共に黒瀬へ鞠見物に出かけた。このとき、伊勢に逗留中の大坂の中村吉兵衛、京都の三宅吉兵衛の鞠を「両人共達者ニ出来候」と評価し、暮れまで見物している〔76〕。大坂の中村は、その後も度々伊勢を訪れており、蹴鞠を行っている〔101〕。

茶の湯についても、他所からの来訪者があった。嘉永六年（一八五三）二月下旬、二松のところに京都の茶人久田栄甫が滞在していた。常善は、二六・二七日の二日間、二松宅を訪れ、北川政武や二松らと共に、久田栄甫が点てた茶や香を楽しんだ〔115・116〕。

また、嘉永三年（一八五〇）八月一七日の浄瑠璃の催しにおいては、『苅萱』「子別レ」、『梅川』「新口村」、『近江源氏』「陣屋」が上演された。『梅川』「新口村」を演じた寿斎という人物に対しては、「下手、論なシ」と辛辣な評価を下す一方で、『苅萱』「子別レ」と『近江源氏』「陣屋」を演じた有利という人物に対しては、「有利久々ニ而聞、上方仕込大場ニて面白候事」と、上方仕込みの芸で上演された大場[34]に対し、高い評価を与えている〔104〕。

以上のように、檜垣常善の芸能文化の受容においては、伊勢近辺だけではなく、上方との関係が見られ、文化ネットワークを通じた、上方文化の受容が見られた。

おわりに

第一章から第五章を通じて、近世後期の伊勢神宮外宮の正禰宜、檜垣常善を取り上げ、文化受容の様相を明らかにした。これまで、檜垣常善は、文化的な面においては、著作物の存在と、和歌・画に通暁した人物であったことのみ知られてきたが、今回『常善雑事記』の分析により、檜垣常善を含む伊勢神宮外宮の禰宜の多様な文化受容の様相を知ることができた。

近世後期、外宮の禰宜同士の結びつきは強く、家業である禰宜の職務や、親戚関係、冠婚葬祭といった家同士の交際において密接な関係を持っていた。このような関係は、文化の受容においても影響を及ぼした。檜垣常善の文化ネットワークは、家業・生活を基礎とする人間関係と、必ずしも家業・生活において緊密な関係を持たない、雅号をもつ人々との文化的結合から構成されていた。常善のネットワークは、伊勢の宮川より内側の神宮領を中心に広がり、文化受容の場も、一部の例外を除いてこの地域に集中していた。正禰宜に課された「禁河の制」の影響もあり、地域的には制約があった

が、常善が生活の拠点とし、文化受容の中心となった伊勢神宮周辺は、茶の湯・芝居・浄瑠璃・能狂言など、多様な文化を受容する環境が整っていた。

これらの文化が、閉鎖的な環境の下形成されたものではなかったということは、先行研究が指摘するとおりだが、[35]諸国から流入する文物が、一様に受け入れられたわけではない。檜垣常善の事例に即していえば、他地域の情報は江戸を中心とした遠隔地から流入し、書籍については、全国各地から集められていた。茶の湯・蹴鞠・浄瑠璃といった芸能文化については、伊勢の周辺や上方との関係が見られた。文化を受容する者の視点から見たときに、情報として伝わるのか、書物によって伝わるのか、身体を介した芸という形で伝わるのかによって、外からの文化の受容のあり方は異なっていたといえよう。

注

(1) 拙稿「近世の東海地方における地域文化の形成―歌舞伎・浄瑠璃の受容と地芝居の上演を通じて―」(『WASEDA RILAS JOURNAL』一、二〇一三年)。

(2) 文化について総合的に論じたものを挙げると、『宇治山田市史』上下巻(宇治山田市、一九二九年)、早稲田大学日本地域文化研究所編『伊勢の歴史と文化』(行人社、二〇〇九年)、『伊勢市史　第三巻　近世編』(伊勢市、二〇一三年)などがある。また、伊勢参りについては、新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、一九八二年)に詳しい。

(3) 『伊勢市史　第三巻　近世編』六六一頁。

(4) 西尾市岩瀬文庫所蔵。清書本一八冊。第一冊目(天保二～嘉永四年)の内容は、日記の主要項目の抜粋である。なお、古典籍総合目録データベース(http://base1.nii.ac.jp/~tkoten/about.html)は、『常善随筆記』一五冊と併せ、一括して『常善雑事記』として登録するが、本論文においては、西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース(https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000048kotenseki)に準じ、天保二年～文久元年までの一八冊のみを扱う。

(5) 『伊勢市史　第三巻　近世編』一五二～一五四頁。

(6) 注(4)、古典籍総合目録データベースによると、『遠祭記事』『御神馬御進献記』『花の構』などがある。

(7) 中村英彦編、川端義夫校訂『校訂伊勢度会人物誌』(楠木博、一九七七年)。

(8) 『宇治山田市史』上巻(宇治山田市、一九二九年)。

(9) 『宇治山田市史』下巻(宇治山田市、一九二九年)、中村英彦編・川端義夫校訂『校訂伊勢度会人物誌』(楠木博、一九七七年)、中西正幸『伊勢の宮人』(国書刊行会、一九九八年)、吉川竜実「中川経雅著『慈裔真語』小考」(『皇學館大学神道研究所紀要』二四、二〇〇八年)など。

(10) 吉川竜実「神宮古典の系譜」、吉田吉里「豊宮崎文庫の創設と展開」、芝本行亮「林崎文庫の創設と展開」(いずれも『皇學館大学神道研究所紀要』二九、二〇一三年、「平成二十三年度皇學館大学神道研究所公開学術シンポジウム神宮祠官の学問」の記録)。

(11) 倉本昭「『経雅卿雑記』拾遺」(『近世文学研究の新展開』、ぺりかん社、二〇〇四年)、「中川経雅の交友録―画僧・月僊との友情―」(『日本文学研究』三九、梅光学院大学、二〇〇四年)、「続・中川経雅の交遊録―本居太平との友情―(その一)(その二)」(『日本文学研究』四二・四三、二〇〇七～八年)。

(12) 以下、断らない限り、『常善雑事記』の記述による。

(13) 前者については、西田兵大夫の内儀(死去は三月五日)、福村土佐の姉末代(四月二九日)であり、後者は、檜垣貞董家の梶笠(三月二七日)・寿

松院（一一月二四日）、長官家の主水（宮後朝楠、四月一三日）、五禰宜松木品彦（八月に越後で客死）、檜垣貞宜（常善の養子である常緒の実父、一〇月二一日）である。

（14）『大神宮叢書　神宮典略』後篇別冊（臨川書店、一九七六年）所収、「二宮禰宜年表」。

（15）以下、【表】を典拠とする場合、表のNoを〔〕で括って示す。

（16）『神宮禰宜系譜』（皇學館大学、一九八五年）所収、『考訂度会系図』二巻四三ウ。

（17）『常善雑事記』弘化二（一八四五）年正月二九日条に「圓明寺・前川屋共昨年参宮、大隅方（＝松木武彦）ニ二三日逗留、七殿（＝檜垣貞董）江も被招ける知人也」と書かれている。

（18）『常善雑事記』弘化二（一八四五）年正月二九日条に「七ツ時えんま江着、支度致し候処、大隅縁家伊豫町前川屋喜右衛門と申方より迎参し居（中略）伊豫町木戸際より五六軒左側、材木屋也」と書かれている。

（19）雅号と本名については、『校訂伊勢度会人物誌』（楠木博、一九七七年）による。

（20）「釜日」とは、茶道において、宗匠が弟子を集めて行う稽古日のことである。

（21）『常善雑事記』弘化二年（一八四五）正月二九日条に「一、津鬼押江近年出懸申度存含候処、折も無之、此節七殿（＝檜垣貞董）亦々忌中ニ付、申合、今払暁出懸候事、尤四五日も相懸り候故、灸穢届宿館江差出す」次のような記述があり、津観音の鬼押え神事に出かけるため、忌中の檜垣貞董と申し合わせ、灸穢届を提出して、二九日より休暇を取っていることが分かる。

（22）『伊勢市史　第三巻　近世編』七二二頁。

（23）『伊勢市史　第三巻　近世編』六九二頁。

（24）『常善雑事記』弘化二年（一八四五）四月一〇日・一一日条。

（25）『伊勢市史　第三巻　近世編』第九章総論および第一節。

（26）安政元年（一八五四）、福原佐平太が『新編鎌倉志』を奉納している（一二月五日条）。

（27）安政二年（一八五五）、下総国香取郡佐原村清宮秀堅が『下総国輿地図』（ママ）を奉納している（一二月四日条）。

（28）安政七年（一八六〇）、伊予国中山弾正琴主が、在京中に『八雲琴譜』を奉納している（一二月三日条）。

（29）安政二年（一八五五）、由良七兵衛秀實（屋号丹波屋）が『心学道之話』を奉納している（一二月四日条）。

（30）安政二年（一八五五）、三河国渥美郡津田新田の久田吉左衛門が『名臣言行録』を奉納し（一二月四日条）、安政五年（一八五八）には、吉田の羽田野敬雄が『古道大意』『古学二千文』『童蒙入学門』『三河国官社私考略』を奉納している（一二月五日条）。

（31）安政元年（一八五四）、伊那郡の上嶋治兵衛が『周易玉契』を奉納している（一二月五日条）。

（32）安政二年（一八五五）、周防国玖珂郡新庄村の岩政要吉信比古が『止由気能御霊』『本末詞解』を奉納している（一二月四日条）。

（33）安政七年（一八六〇）、中島太郎廣足が『詞王緒補遺』を奉納している（一二月三日条）。

（34）芝居で最も見ごたえのある場面（『日本国語大辞典』）。

（35）注（3）。

付記

資料の閲覧・利用に際して、西尾市岩瀬文庫に大変お世話になった。この場を借りて感謝申し上げる。本稿は、二〇一四年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費・課題番号二五・三二五九）による研究成果の一部である。

表　『常善雑事記』文化記事

No.	西暦	月日	内容	場所	参加者	詳細
1	1845	正月25日	遊行	宮崎	常善・二松	宮崎近辺から諸所へ遊び歩く。
2	1845	正月29日	旅行	津	常善・檜垣貞董（七）・荷物持数名	灸穢届を出して、津へ出かける（～２月７日）。
3	1845	正月29日	茶の湯	円明寺（津）	常善・檜垣貞董（七）・荷物持数名・前川屋喜右衛門・円明寺院主	津へ到着し、円明寺にて、前川屋の点前で薄茶を振る舞われる。
4	1845	２月１日	能・鬼押神事	観音寺（津）	常善・檜垣貞董（七）・前川屋喜右衛門息子・円明寺より付添人	津観音寺にて鬼押神事を見物。演能もあり。
5	1845	２月１日	茶の湯	円明寺（津）	常善・檜垣貞董（七）・前川屋喜右衛門	円明寺にて、薄茶・懐石の相伴にあずかる。
6	1845	２月２日	茶の湯	円明寺（津）	常善・檜垣貞董（七）・前川屋喜右衛門	朝食後、小座敷にて薄茶。院主へ暇乞の挨拶をして前川屋へ立寄る。
7	1845	２月２日	寺社参詣	不明	常善・檜垣貞董（七）	初午夜宮の見物の予定が、天気が悪く、中止。
8	1845	２月３日	寺社参詣	不明	常善・檜垣貞董（七）	岡寺見物。
9	1845	２月３日	囲碁・香道	松坂か	常善・檜垣貞董（七）・石井与市	岡寺より戻り、碁・香を楽しむ。途中から石井与市が参加。
10	1845	２月７日	—	—	—	宿館へ灸治の穢れが明けたことを届け出る。
11	1845	２月12日	寺社参詣	不明	常善・二松	桃山稲荷に二松君と出かける。
12	1845	２月13日	茶の湯	鶯軒宅（不明）	常善・鶯軒・帯刀・正住・内記・神田など	鶯軒の茶席に出かける。
13	1845	２月23日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・鶯軒・採蘭（幸福将監）	茶席を設ける。
14	1845	３月３日	花見	文庫（岡本町）	—	豊宮崎文庫の桜が満開となった。
15	1845	３月16日	芝居	上中之地蔵町	—	中之地蔵芝居初日。
16	1845	３月21日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・前川屋喜右衛門・檜垣貞董（七）	松木大隅（武彦）方に津の前川屋が逗留中なので挨拶する。自宅で薄茶を振る舞う。
17	1845	４月５日	茶の湯	採蘭宅（八日市場町）	常善・採蘭（幸福将監）・木蘭（来田本親）・讃岐・和琴	採蘭の釜日に出掛ける。
18	1845	４月12日	芝居	古市町	常善・津妙清院方のこらず・常善方（五百枝・お市・お房・お幸・小鶴・清六・平左衛門・下部弥助・五郎兵衛など）	伊勢参宮に来た津妙清院の人々と古市芝居見物。常善は昼過ぎより出かける。芝居が済んだあと、柏屋で踊りを見物、酒を飲む。
19	1845	４月22日	芝居	上中之地蔵町	常善・二松・鶴年（松木茂彦）・遜弁	中之地蔵芝居見物。
20	1845	４月24日	芝居	上中之地蔵町	家人・初枝	家内残らず中之地蔵芝居見物。初枝殿も同伴。
21	1845	５月12日	芝居	古市町	常善・二松・黙蛙・里揚・笹雄・北川	古市芝居見物。
22	1845	５月13日	芝居		家人のこらず・常緒	家内残らず口芝居見物。夕方より縫殿（常緒）が来る。
23	1845	５月15日	芝居	上中之地蔵町	常善・鶴年（松木茂彦）・隼人	中之地蔵芝居見物。帰り笠亭で酒を飲む。
24	1845	５月28日	茶の湯	橋村壱岐宅（上中之郷町）	常善・橋村壱岐・二松・主水・大蔵・左衛門	役免宗旨内願の一件について話し合い。
25	1845	５月29日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・二松・橋村壱岐・採蘭（幸福将監）	茶席を設ける。
26	1845	６月４日	茶の湯	橋村壱岐宅（上中之郷町）	常善・宮後朝喬（一）・檜垣貞董（七）・松木茂彦（九）・他の禰宜の名代	高田出雲の装束講ののち、茶席を設ける。
27	1845	６月５日	茶の湯	採蘭宅（八日市場町）	常善・採蘭（幸福将監）・木蘭（来田本親）・祝部・堤・常明寺・長尾	採蘭の釜日に出掛ける。
28	1845	７月16日	カンコ踊	不明	常善・檜垣貞董（七）・笹雄・北川丹下（橘園、政武）	カンコ踊を見物する。
29	1845	７月17日	踊り見物	田中中世古町か	—	田中にて踊を催すという旨を承る。
30	1845	７月19日	茶の湯	久志本常達宅（四ッ谷）	常善・檜垣貞董（七）・久志本常達（二）・北川丹下（橘園、政武）	薄茶を振る舞われる。
31	1845	８月11日	会式	岩淵町	常善・お象・乳母・喜曽太	辻稲荷の会式に出掛ける。
32	1845	８月14日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・並斎・二松・鶯軒	独楽釜をかける。

No.	西暦	月日	内容	場所	参加者	詳細
33	1845	8月15日	月見	麻吉（古市町）	常善・大蔵・十松（河邊都盛）・二松・停雪・和琴	大蔵が月見を催す。麻楼（麻吉）へ行く。
34	1845	8月17日	茶の湯	袴田君宅（宮後西河原町）	常善・鶯軒・緑雪・神田・停雪・袴田君（宮後朝喬＝一）	袴田君宅で、薄茶・炭点前・懐石。
35	1845	8月18日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・十松（河邊都盛）・二松・白楼園・香菓園	夕方より月見の来客。薄茶を振る舞い、酒を出す。
36	1845	8月28日	能	不明	—	久保倉にて演能の知らせ。差支えがあり見物できず。番組は「翁」「高砂」など。
37	1845	10月4日	茶の湯	橋村壱岐宅（上中ノ郷町）	常善・久志本常庸（五）・久志本常伴（七）・他の襴宜の名代	装束講のあと、茶席を設けて雑談する。
38	1845	10月18日	故松木品彦（五）の形見分け	—	常善・檜垣常緒	品彦の遺物の玉僊画は常善へ。筆と俳諧書「阿奈具摩集」は常緒へ。
39	1845	11月15日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・宮後朝喬（一）・松木貞董（六）・壱岐・大蔵	自宅にて内匠家資金繰りの件など内談。昼より釜をかける。
40	1846	正月16日	舞見物	宮後西河原町か	常善・お象・お市・帯刀	町内の富突きに行く。三日市賢丸のところで御頭舞を見物する。
41	1846	4月26日	勧進能見物	亀山	—	和屋権大夫が山田領亀山で勧進能を催す。
42	1846	閏5月27日	芝居	不明	子供両人・隼人・平左衛門・清六・喜曽太・おさと・次女両人・お幸・下部両人	口芝居見物。
43	1846	7月16日	踊り	不明	—	今晩より踊りが賑わしい。
44	1846	10月21日	茶の湯	里亭（不明）	常善・二松君	内匠家の借用金について里亭で話合い。明日金森にて茶席を設けるという話がある。
45	1846	10月22日	茶の湯	琴屋老人宅（田丸城下か）	常善・琴屋老人（金森得水）・宮後朝喬（一）・二松・採蘭（幸福将監）	久志本常庸（五襴宜）から、琴屋老人からの招待の手紙を受け取ったので、参上する。
46	1846	10月24日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・之青・採蘭（幸福将監）・二松君	二松君は暮れに訪れた。
47	1846	10月25日	茶の湯	採蘭宅（八日市場町）か	常善・採蘭（幸福将監）・帯刀・常明・中西佐渡・長尾	採蘭の釜日に行く。
48	1846	10月29日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）か	常善・檜垣貞董（六）・主水・大蔵	茶席を設ける。内談あり。
49	1846	11月2日	茶の湯	荒木田氏養宅（浦田）か	常善・荒木田氏養	内二卿（氏養のことか）に相談のため、別宅に向かう。
50	1846	11月4日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）か	常善・今太夫	茶席を設ける。
51	1846	12月25日	茶の湯	採蘭宅（八日市場町）か	常善・採蘭（幸福将監）・大典・祝部・御巫・常明・光源寺・讃岐・尾崎など。	採蘭仕舞釜。
52	1846	12月26日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）か	常善・採蘭（幸福将監）・之青	茶席を設けたところ、採蘭・之青が来る。薄茶・うどんを出し、四つごろまで談話する。（27日の記事）
53	1847	2月18日	—	—	常善・檜垣貞董（六）	明日より内々に、檜垣貞董同伴で松坂の開帳見物に行くことに決めた。三日ほどかかるので、一昨年と同様の文言の灸穢届を宿館に提出する。
54	1847	2月19日	旅行	新茶屋・徳和	常善・檜垣貞董（六）・主膳・弥助・正城・下部・藤吉・笹尾・坂本氏	四つ頃よりでかけ、坂本氏のところへ八つ半ごろ到着。土産に八屋枝柿・饅頭などを渡す。笹尾と合流する。
55	1847	2月20日	開帳	松坂	—	天気が悪く中止。
56	1847	2月22日	開帳	松坂	常善・檜垣貞董（六）・坂本家人など25、6人	参詣し、曲馬・福助など見物した。他にも見世物がたくさんあったが、どれも子供だまし同様だったので見なかった。昼食後、環・弥助・主膳とともに愛宕那智滝・岡寺見物に行く。
57	1847	2月25日	花見	文庫（岡本町）	—	文庫の花が盛りである。
58	1847	2月27日	—	—	—	25日に帰宅、26日に宿館へ灸穢が明けた旨、届出る。
59	1847	4月4日	開帳	越後	—	越後養艸寺薬師で、28日より年忌開帳が始まるとのこと（情報のみ）。
60	1847	4月20日	座敷狂言・俄	亀田宅（西河原）か	【客】常善・山城篤・芝田健助・柏木両人など。【演者】黙蛙（久志本常伴）・越後・和琴・亀田	今晩、七殿など主催の芝居あり。座敷に桟敷を拵え、古市から提灯を取り寄せた。午後、山城篤・芝田健助・柏木夫婦などが前囃子を稽古した。五つ過ぎに古市芝居連中がやってくる。「千両幟」「妹背山」などを演ずる。

No.	西暦	月日	内容	場所	参加者	詳細
61	1847	4月24日	芝居	古市町	常善・二松・鶯軒・和琴・笹尾・斎路・安達・常緒・主膳・檜垣貞董（六）	古市芝居見物。
62	1847	4月25日	芝居	古市町	家人・北川・田中	古市芝居見物。
63	1847	4月25日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）	常善・二松君	茶席を設け、二松君がやってきて、暮れまで談話。
64	1847	5月27日	芝居	古市町	【客】常善・檜垣貞董（六）・二松・宮奉行・安達・笹尾 【主方】喜多隼人・辻左京・祝部帯	古市芝居見物。以前、喜多隼人が月読物忌中に檜垣貞董を芝居に招いていた。この件は差支えがあって延期となっていたが、今日催しがあった。
65	1847	6月5日	茶の湯	鶯軒宅（不明）	常善・鶯軒・檜垣貞董（六）・松木茂彦（八）・安達・黙蛙（＝七、久志本常伴）	鶯軒より使者が来て、一同揃って出かける。薄茶が振る舞われる。その後、花月楼にて酒宴。
66	1847	7月17日	踊り	不明	—	近頃町々で踊りがあり、賑やかである。
67	1847	11月3日	軍談	自宅（宮後西河原町）か	常善	上之郷で興行していた講釈師秀山を招き、軍談。1日から4日の昼まで催す予定だったが、差支えがあり、今晩きりで読み切りとなった。「赤穂記」であり、相応におもしろかった。
68	1847	11月12日	浄瑠璃	北川丹下（政武）宅（田中中世古町）	常善・二松・北川・檜垣貞董（六）・松木茂彦（八）・両家家人	二松君の主催で、北川のところで浄瑠璃があった。松木茂彦・檜垣貞董とその家人が来ており、当方は両人のみ。演目は、「阿古屋の松、藤吉住家」「宵庚申」など。「二代鑑」「お半長右衛門」「朝かお（朝顔日記）」は出来がよかった。他も相応。戸島は論外であった。
69	1847	11月21日	軍談	自宅（宮後西河原町）か	常善・松木茂彦（八）・珎都	秀山を招き、19日から21日で読み切り。演目は「伊達騒動」。
70	1847	11月24日	茶の湯（闘茶会）	二松宅	常善・二松君・十松（河邊都盛）君・並斎・端隠・和琴・安達・松覃・笹尾	外出の帰り、二松君のところへ立寄ったところ、闘茶会の日だったので、見物した。飛び入り参加で松覃・笹尾。
71	1847	12月3日	茶の湯	和琴宅	常善・和琴君・十松（河邊都盛）親子・二松親子・端隠・停雪・梅泉	和琴君のところで、闘茶会の催しがあり、出席した。
72	1847	12月7日	茶の湯	泉半（岡本町）	常善・雲所・二松親子・並斎・端隠・和琴・梅泉・鶯軒・黙蛙（七、久志本常伴）・玉渕（久保倉主殿）・一掌（村井十四郎）・松坂喜兵衛（久保倉縁家、号延世）	岡本町泉半のところで、闘茶仕舞会があり、出席する。
73	1848	正月15日	茶の湯			
74	1848	2月16日	茶の湯	宮後朝喬宅（宮後西河原町）	常善・宮後朝喬・楢双澪・笠松梅栖	宮後朝喬より使いが来て、茶の湯に招待された。神事の後になるので、午下刻ころとなった。初炭、菓子、薄茶、湯続、炭、薄茶。
75	1848	2月19日	茶の湯	不明	常善・十松（河邊都盛）・二松・閏琴・端隠・停雪・和琴・梅泉・鶴年（松木茂彦）・香菓	年明け初の闘茶会に出席した。
76	1848	2月23日	鞠見物	黒瀬村か	常善・二松君	黒瀬へ二松と一緒に鞠見物に行く。この度は、浪華の中村吉兵衛と、京の三宅吉兵衛が逗留中である。二人とも達者で、日が暮れるまで見物した。
77	1848	2月24日	茶の湯	自宅（宮後西河原町）か	常善・他3人	松翁七回忌。初炭・薄茶・湯続・炭・薄茶。
78	1848	2月28日	茶の湯	閏琴宅か	常善・雲所・二松・端隠・停雪・和琴・兀莽（島田）・梅泉・對松・甕中（越後）・東籬（兼坊）・閏琴	閏琴主催の闘茶会に出席した。
79	1848	3月2日	花見	文庫（岡本町）	常善・鶴年（松木茂彦）	鶴年同伴で、文庫に行く。花は八分の盛りであった。
80	1848	3月2日	鞠見物	黒瀬村か	常善	黒瀬で鞠見物。
81	1848	3月24日	鞠	麻吉楼（古市町）	—	麻吉楼で鞠を催す。差支えがあり、不参加。
82	1848	4月24日	鞠	黒瀬村か	常善・二松・御職・沙明・雨有・大坂両人・三宅	天候不良のため延期となっていたのを、黒瀬にて今日催す。
83	1848	7月16日	辻踊り	不明	常善・子供両人	子供二人を連れて丸辻踊りの見物に出かける。

No.	西暦	月日	内容	場所	参加者	詳細
84	1848	７月22日	会式	妙見町か	—	妙見会式で賑わしく、踊り・練り物があるということである。
85	1848	７月25日	会式	不明	常善・久保・前野・岩渕・田中	天神会式が町々で賑やかである。久保・前野・岩淵・田中などが見物に来る。作り物も少々ある。
86	1848	11月９日	相撲	不明	—	昨日（11月８日）が初日で、晴天５日間の間興行。
87	1848	12月13日	鞠	官家（宮後西河原町）	常善・堤右門・中津隼人・木村七兵衛・桑原喜市・三宅楠兵衛・吉川	官家にて鞠の催し。祭主殿が始終観覧。
88	1849	２月10日	能	不明	—	初午北方能あり。番組は、「翁」「難波」など、狂言もあり。
89	1849	３月５日	花見	文庫（岡本町）	常善・二松・安達	文庫へ行く。11日には満開か。
90	1849	３月11日	花見	文庫（岡本町）	常善・宮後朝喬（一）	文庫の桜が満開。
91	1849	３月13日	遊行	文庫（岡本町）	常善・鶴年（松木茂彦）	鶴年同伴で文庫から中山寺・世儀寺等へ行く。
92	1849	閏４月５日	芝居	不明	常善・若夫婦・お十襲・田中	田中の誘いで奥芝居見物。
93	1849	閏４月28日	芝居催し	不明	常善・二松・鶯軒・二彳・数馬・お洞・高田	芝居物が御停止となっていたので延期していたのを今日催す。
94	1849	６月３日	口芝居見物	不明	常善・高田・久志本常庸（五）・松木茂彦（八）	高田の振舞で、口芝居を見物に行く。自分は八つごろから、五・八と共に行く。「阿漕（勢州阿漕浦ヵ）」一幕、「源平つゝし」一幕見物して帰る。
95	1849	６月11日	茶の湯・席画	楠部	常善・古森宜三・善蔵・金右衛門・永野・恵川・村井・川上・柴田親子・庄三（取持）	安達を通じて、古森催しの楠部納涼の知らせが一昨日自分と二松のところへ来た。午後から安達と共に行く。闘茶二遍、古森の席画、川上の書などがあった。
96	1849	10月18日	咄家	自宅（宮後西河原町）か	常善	今晩咄家を呼んだ。可もなく不可もなくであった。
97	1850	２月26日	鞠	麻吉（古市町）	—	麻吉楼で蹴鞠がある。
98	1850	２月26日	花見	文庫（岡本町）	—	文庫の桜が満開である。
99	1850	２月26日	芝居	中之地蔵町	—	中之地蔵の子供芝居は大入りである。
100	1850	４月24日	開帳	常明寺門前町	常善・家人・松木茂彦（八）	常明寺開帳で、家人は残らず出かける。松木茂彦と見世物を見物する。
101	1850	４月27日	鞠	黒瀬村か	常善・中村（大坂）	大坂の中村が来ているので、黒瀬へ行き、蹴鞠をする。
102	1850	７月25日	会式	不明	—	天神会式、踊りあり。
103	1850	８月３日	人形芝居	古市町	常善・おとは・子供２人・田中両人	古市人形を見物に行く。
104	1850	８月17日	浄瑠璃催し	野亭（不明）	常善・新左・宮後朝喬（一）・檜垣貞董（六）・上部・北川丹下（橘園、政武）・久志本常伴（七）・久志本常庸（五）・お美尾・笹尾・北川家内	新左の催しで、野亭にて浄瑠璃あり。「苅萱」「梅川」「近江源氏」を聞く。人数は50人ほど。「有利」は上方仕込の大場（＝芝居の見どころ）であり、面白かった。
105	1850	９月27日	狂言	小林宅（不明）	常善・小林・檜垣貞董（五）・松木偉彦（九）・三郎大夫	小林のところで遷宮奉納狂言あり。番組は「夷大黒」「文山賊」など。小林親子に饅頭100個遣わす。
106	1850	10月２日	能	久保倉正意宅（岩淵町）	常善・久保倉要人・久志本常庸（四）・檜垣貞董（五）・松木偉彦（九）・三郎大夫・笹尾・愛松院	久保倉要人にて、遷宮奉納能の催しがあった。番組は「翁」「淡路」など。三日市（帯刀）と小林親子にいく餅を100ずつ遣わす。
107	1850	10月２日	洋学に関する触	—	—	奉行所から呼び出しがあったため、松田数馬を遣わしたところ、書付を下された。その中の一つで、９月に出た触の内容。世間で蘭書とその翻訳が流行しているが、誤った解釈のものも間々ある。今後は蘭書については長崎奉行所に書名を提出し、許可を得たもののみ流布させること。
108	1850	10月３日	能	不明	常善	素襖落より見物する。安宅・羅生門が面白かった。
109	1850	10月５日	能	久保倉宅（岩淵町）	—	久保倉にて能の催しがあった。当番中のため、見物はしなかった。番組は「鶴亀」「橋弁慶」など。
110	1850	10月12日	茶の湯	楓橋宅（久保倉正意宅、岩淵町）	常善・楓橋（久保倉正意、要人）・宮後朝喬（一）	宮後朝喬より楓橋の茶席への誘いがあった。出席の旨を伝える。

No.	西暦	月日	内容	場所	参加者	詳細
111	1850	10月13日	茶の湯	楓橋宅（久保倉正意宅、岩淵町）	常善・楓橋（久保倉正意、要人）・宮後朝喬（一）・重助	楓橋の茶席に行く。薄茶と懐石が出る。
112	1850	10月15日	軍書	二松宅	常善・宮後朝喬（一）・福村・和琴・中津・上部・北川・愛松院・二松君	二松君の主催で軍書読みあり。講釈師は京林で、あまり上手ではなかった。演目は「大岡捌」と「山崎合戦」であった。
113	1850	10月19日	茶の湯	鶯軒宅（不明）	常善・宮後朝喬（一）・二松・村井・鶯軒	鶯軒から茶席の誘いがあったので参加する。
114	1853	２月21日	茶の湯	二松宅	常善・二松	二松の茶席に行く。
115	1853	２月26日	茶の湯・香	二松宅	常善・二松君・久田栄甫・政武・重祐	二松君のところへ行く。京都の久田栄甫が滞在しており、久々に十種香・小鳥香などがあった。薄茶もあった。
116	1853	２月27日	茶の湯・香	二松宅	常善・二松君・久田栄甫・政武・重祐	二松君のところへ行く。出席者は昨日の通り。自分と久田の点前で薄茶。その後、昨日と同様香を行った。栄甫は明日出立とのこと。
117	1853	２月28日	花見	文庫（岡本町）・中之地蔵町	常善・二松・北川・久守・廣田・大蔵	二松・北川と共に文庫へ行く。今日満開であった。その後、中之地蔵川西浦の桃を見物した。
118	1853	３月23日	茶の湯	松木茂彦宅（田中中世古町）	常善・松木茂彦（六）・久志本常庸（三）・北川丹下（橘園、政武）	釜を掛け、暮れまで話をする。
119	1853	３月26日	茶の湯	二松宅	常善・二松君・沙明	二松君のところへ行ったところ、薄茶が振る舞われた。
120	1853	４月６日	芝居	麻吉楼（古市町）	常善・津妙清院の人々・お千代・子供２人・おてう・すみ江・喜曽太・お三尾・喜代丸・下部・乳母・下部・政・又右衛門・午左衛門・織衛	芝居がなかったので、舞子を観ようと麻吉楼に行く。
121	1853	４月９日	茶の湯	松木茂彦宅（田中中世古町）	常善・松木茂彦（六）・北川丹下（橘園、政武）	奥山からの帰りに松木茂彦のところへ立寄り、釜をかける。北川丹下も来て、夕方まで遊ぶ。
122	1853	４月９日	芝居	上中之地蔵町	—	中之地蔵芝居が今日初日である。
123	1853	４月11日	茶の湯	官家（宮後西河原町）	常善・久志本常庸（三）・檜垣貞董（四）・松木茂彦（六）・古森内記（師職布衣惣代）・中西上総（祝部惣代）・箕曲甚太夫（御笥作）・岡村彦三郎（神楽役人）	昼過ぎ、官家へ行く。釜が掛かり、薄茶があった。
124	1853	４月17日	香	休分庵（不明）	常善・檜垣貞董（四）・松木茂彦（六）・端隠・北川丹下（橘園、政武）	十種香。
125	1853	10月８日	茶の湯	不明	常善・上戸様	上戸様のところに行き、膳のあと薄茶をいただく。
126	1853	11月22日	館咄し	不明	常善・二松・二松家人・田中・中村など。	館咄しへ行く。咄家は源五・圓白・菊枝（林屋正蔵改め）であった。圓白は随分面白かった。源五は露払いであった。
127	1854	３月11日	花見	文庫（岡本町）	—	文庫の桜が満開。庭の山桜も同様。
128	1854	３月26日	浄瑠璃	不明	—	浄瑠璃が近辺であるということを再平より伝えてきた。
129	1854	７月７日	踊り	不明	—	—
130	1854	９月２日	文庫	文庫（岡本町）	—	豊宮崎文庫講堂修復の手当金について回達。
131	1854	10月18日	子供歌さらえ	檜垣中務家（大世古）	お千代・お歌・田中・松木茂彦（六）・家人	久志本常庸から、大世古中務家で子供歌さらえがあるとのことで案内があった。常善自身は行かず、家人が行った。
132	1854	11月１日	茶の湯	北方庵（不明）	—	９月24日に北方庵で千賀主催の会席があった。その記録を黙蛙君（久志本常伴）から借りて写す。
133	1854	12月５日	文庫	文庫（岡本町）	—	文庫奉納物の覚書。『緑芋村荘詩鈔』、『常盤集』、『周易玉契』など。
134	1855	正月22日	茶・錦絵土産	江戸	—	出府した松木大隅（＝武彦）が昨夕帰宅した。大隅から茶１袋と錦絵３枚を土産にもらう。
135	1855	２月21日	花見	文庫（岡本町）	常善・宮後朝喬（一）・久志本常庸（三）・檜垣貞董（四）・久志本常伴（五）・松木茂彦（六）・松木偉彦（七）・檜垣貞賢（八）	中飯後から岩戸などに行き、大黒谷から文庫の花見をする。

No.	西暦	月日	内容	場所	参加者	詳細
136	1855	４月10日	作り物細工	櫛田・新茶屋	常善	櫛田・新茶屋へ行く。作り物は櫛田よりも新茶屋の方が評判がよい。櫛田は船の作り物。新茶屋は、長持ち、高砂松の作り物、四人駒三・和藤内・四午天神である。これらは出来がよく評判がよい。
137	1855	５月25日	書物借用	春木宅	常善・春木	東武実録（徳川秀忠事蹟録）21冊の借用を頼む。その後春木から東武実録が届く。
138	1855	６月５日	石曳	辻傳（八日市場）	常善	石曳の見物。作り物、踊り、囃子などあり。
139	1855	６月10日	石曳	川崎村	—	河崎にはいろいろ作り物が出ている。見物も多い。
140	1855	６月19日	中之地蔵芝居人形	中之地蔵町	お歌・お千代・いさを・嘉吉・林助	家人が中之地蔵芝居の人形見物に行く。
141	1855	７月16日	相撲	常明寺門前町	—	常明寺において晴天５日間の相撲興行あり。今日大入り。
142	1855	10月７日	能	古市町か	—	杉本屋・大木追善のため、久世戸の寺において能あり。10月６日が初日。番組は「小鍛冶」「箙」など。演者は和谷権太夫ら。
143	1855	12月４日	文庫	文庫（岡本町）	—	奉納物の覚書。『下総国輿地図』（下総国香取郡佐原村清宮秀堅より奉納）、『止由気之御霊』『本末謂解』（周防玖珂郡新庄村岩政信比古より奉納）など。
144	1855	12月５日	浄瑠璃催し	北川丹下（政武）宅（田中中世古町）	常善・檜垣貞董（四）・松木茂彦（六）・松木偉彦（七）・福村親子・御巫・奥山・（＋各々家人・子供）	北川丹下の快気祝い。浄瑠璃の催し。番組は『安達』『信長記』『朝顔』など。『加々美山』「長局」は初めて聞いたが、面白かった。
145	1856	２月６日	浄瑠璃	田中宅	常善・田中・織部・北川・（＋子供）・【演者】戸嶋屋・島田	浄瑠璃の催しあり。
146	1856	４月５日	唐船見物	鳥羽	宮後朝喬（一）・檜垣貞董（四）・お千代	薩州様の唐船造りの御手船が鳥羽に来ていて賑やかである。宮後朝喬と檜垣貞董が内々に来て誘うので、お千代が出かけた。
147	1856	４月27日	開帳、軽業	実性寺	常善・田中両人・子供両人	実性寺開帳が来月５日まで日延べする。軽業等見物に行く。
148	1856	４月28日	芝居	古市町	常善・二松・松木茂彦（六）・松木偉彦（七）	二松からの誘いで、久々に古市芝居見物に行く。
149	1856	５月27日	芝居	不明	常善・二松君・藤木両人・愛松院・松木偉彦（七）・おせゐ・お千代・おかた・供数人	二松君の誘いで、口芝居を桟敷で見物。
150	1856	６月20日	踊り	宮後西河原町	常善・田中	町々で踊りあり。
151	1856	６月21日	踊り	宮後西河原町	常善・二松	町々で踊りあり。
152	1856	６月22日	踊り	宮後西河原町	常善・田中両人・子供	今晩も踊りが賑やかである。田中両人と子供も来たので、うどんを出す。
153	1856	10月28日	相撲	新町	—	新町中相撲は今日で仕舞。
154	1856	12月４日	文庫	文庫（岡本町）	—	文庫奉納物の覚書。『紀伊国造家譜』など。
155	1858	７月７日	盆踊り	—	—	盆踊りに関する触。
156	1858	７月11日	富突き	—	—	富突き興行禁止の触。
157	1858	７月25日	会式、踊り無し	大世古・曽祢・高柳	—	諸所の会式、踊りはなし。
158	1858	７月26日	会式	世古	常善・檜垣貞董（四）・根丸	世古の鎮守では会式はいつもの通り行っている。組々に２つずつ作り物があり、、亀田の前踊りがあり、相応に賑わっている。
159	1858	８月１日	会式	不明	常善	楾の会式。踊りの他、何もなし。
160	1858	８月１日	練り物	中之地蔵町	常善・北川夫婦・田中夫婦・根丸	中之地蔵で盂蘭盆練り物あり。
161	1858	10月27日	茶の湯	宰記宅	常善・宰記	宰記方へ行き、いさをの事と仕法立の事を申し入れる。その後、雑談し、薄茶２碗いただく。
162	1858	10月27日	茶の湯	北川丹下（政武）宅（田中中世古町）	常善・檜垣貞董（四）・松木偉彦（七）・北川	夜、北川道具会に行く。
163	1858	12月５日	文庫	文庫（岡本町）	—	文庫奉納物の覚書。『虎丸御座船襖画掛物』など、山田奉行の渡辺孝綱より寄付。『古道大意』など、三河国吉田方羽田野敬雄より奉納。『摸刻古本論語集解』を洞津の岡傳左衛門より、『旗鼓使令』を久留米の山田六右衛門より奉納。他多数。

No.	西暦	月日	内容	場所	参加者	詳細
164	1859	9月28日	能興行	清雲院（不明）	主税・喜代丸・供（喜三太・勇・才）	清雲院で能の興行が許可される。番組は「翁」「高砂」など。
165	1859	9月29日	能見物	清雲院（不明）	主税・貞吉（十）・供（喜三太・勇）	能見物。
166	1859	9月30日	能見物	清雲院（不明）	主税・貞吉（十）・喜代丸・供（清右衛門・勇）	能見物。
167	1859	10月7日	浄瑠璃催し	自宅（宮後西河原町）	常善・田中両人・喜代丸	太夫を頼み、浄瑠璃を催す。「姫子松子日遊」「恋飛脚大和往来」「勢州阿漕浦」。阿漕は面白かった。他に案内は出さず、田中夫婦と喜代丸のみ。
168	1859	12月1日	文庫	文庫（岡本町）	—	文庫奉納物の覚書。『振濯録』（和州長柄村末屋利兵衛奉納）、『倭姫世記』（神戸町年寄磯部宇右衛門奉納）など。
169	1860	3月5日	文庫講釈	文庫（岡本町）	—	山田奉行文庫講釈聴講について回達。
170	1860	3月6日	文庫講釈	文庫（岡本町）	常善・宮司・檜垣貞董（四）・岩渕修理・久保倉主殿・堤右衛門など。	山田奉行が文庫の講釈を聴講。講師は御巫尚書、松田右兵衛らで、大祓祝詞、論語、老子、大学、孝経などを講義。聴衆は80人程度。
171	1860	3月13日	文庫席書	文庫（岡本町）	主税・供（喜三太・勇）	中西手習連中が文庫において席書（習字の会）を催す。
172	1860	3月21日	花見	文庫（岡本町）	—	文庫の桜が満開である。
173	1860	4月5日	文庫講釈	文庫（岡本町）	—	奉行所より、文庫において毎月二・六の日に御巫尚書が講釈をするようにと回達あり。志のある者は勝手に聴講してよいとのこと。
174	1860	4月25日	開帳	丹生大師（多気）	お千代・主税・供（清内・お蝶・小桜・長屋才）	お千代が丹生大師開帳に行く。
175	1860	5月17日	能	清雲院（不明）	主税・喜代丸	清雲院で奉納能あり。番組は、「老松」「田村」など。雨が降ったため、「老松」のみで中止。
176	1860	5月22日	能	清雲院（不明）	主税	清雲院で奉納能あり。番組は、「鞍馬天狗」「一角仙人」など。「一角仙人」途中で雷雨となり、中止。
177	1860	5月23日	能	福嶋方	主税	昨日のやり直し。
178	1860	6月12日	文庫	文庫（岡本町）	—	御奉行所より文庫へ奉納する軸物ができたので、今日檜垣貞董が北方へ持参する。
179	1860	9月5日	浄瑠璃（中止）	自宅（宮後西河原町）か	—	浄瑠璃の会を催すつもりだったが、福村老母の病気が重いので、中止となった。
180	1860	12月2日	文庫	文庫（岡本町）	—	文庫奉納物の覚書。『八雲琴譜』（伊予国人在京中山弾正琴主奉納）、『詞王緒補遺』（長崎中島太郎廣足奉納）など。
181	1861	4月17日	能	清雲院（不明）	山田奉行・久志本常伴（四）・貞賢（七）	山田奉行が神宮参拝後、能をご覧になるとのこと。番組は、「弓八幡」「敦盛」など。
182	1861	6月12日	文庫	文庫（岡本町）	常善・久志本常庸（二）・檜垣貞董（三）・久志本常伴（四）・松木茂彦（五）	文庫にて打合せ、示談。明日役所へ申上げることに決まる。福嶋・伊豆へは松木茂彦より手紙を出すことになった。
183	1861	6月26日	文庫	文庫（岡本町）	宮司・橋爪左門・内宮禰宜・久志本常庸（二）	文庫にて立会。異国人の旅行に際して、神三郡には立ち入らせないようにとの伺いを出すことが決まった。このことは昨秋申上げたが、相談の結果、今回再び伺いを出し、御差留を願い出ることになった。
184	1861	7月15日	踊り	—	—	時節柄、町々では踊りがない。
185	1861	7月25日	会式、踊り	—	—	町々の会式は、時節柄至って静かである。
186	1861	8月11日	文庫立合	文庫（岡本町）	常善・宮司・橋爪左門・檜垣貞董（三）・松木偉彦（六）・足代玄蕃・堤長門	色々話合い。
187	1861	9月24日	能	清雲院（不明）	—	番組は、「小鍛冶」「清経」など。
188	1861	10月14日	能	山田大路家	常善・主税・織部	番組は、「高砂」「経政」など。

・記事の内容はすべて『常善雑事記』（岩瀬文庫所蔵）による。
・文化活動の場、雅号を持つ人物の本名は『校訂伊勢度会人物誌』を参照した。
・外宮禰宜については、長官＝（一）、二禰宜＝（二）、三禰宜＝（三）のように名前の後ろに記した。